

## 略歴書

藤本 滋（ふじもとしげる）

神奈川大学工学研究所 客員教授 工学博士



【専攻分野】機械工学、耐震工学

### 【本会活動】

地震工学会誌編集委員会（委員）：2007年6月～2009年5月

論文編集委員会（委員）：2010年6月～2012年5月

原子力発電所の地震安全の基本原則研究委員会（幹事）：2016年4月～2020年3月

役員候補推薦委員会（委員）：2020年6月～2022年5月

### 【略歴】

1973年 慶應義塾大学工学部機械工学科 卒業

1978年 慶應義塾大学大学院工学研究科 機械工学専攻 博士課程 修了 工学博士

1978年 （株）東芝

2004年 湘南工科大学機械デザイン工学科・大学院機械工学専攻 教授

2011年 東京都市大学原子力安全工学科・大学院共同原子力専攻 教授

2016年 神奈川大学機械工学科・大学院機械工学専攻 教授

2022年 神奈川大学工学研究所 客員教授（現在に至る）

### 【受賞】

1983年 （社）日本機械学会 奨励賞「電力機器の耐震設計法の開発」

### 【著書および主要論文(代表的なもの 10編以内)】

(8) 藤本滋, 小島翔, 一木正聡 ; La 添加積層 PZT 素子を電源とした自立型無線加速度モニタリングシステムの実証実験, 電気学会論文誌 E, Vol.141, No.10, pp.356-363,

2021-10.

- (7) 藤本滋, 今井健嗣, 一木正聡; 圧電素子を用いた振動発電手法に関する研究 (第3報, 積層圧電素子の最適化積層数の検討), 日本設計工学会誌, Vol.52, No.9, 2017-9, p567-p582.
- (6) 藤本滋, 一木正聡, 矢野聡, 北原時雄; 圧電素子を用いた振動発電手法に関する研究 (第1報, 添加剤を加えた圧電素子の発電特性), 日本設計工学会誌, Vol.47, No.12, 2012-12, p596-p602.
- (5) S. FUJIMOTO, H. NIWA, H. KONDOU, K. GUNYASU, N. TAKAMATSU, H. SHIBATA, F. HARA, T. FUJITA, K. KUBO, K. TERADA, Y. SASAKI; Seismic Proving Test of Process Computer Systems with a Seismic Floor Isolation System, PVP-Vol.319, Seismic, Shock & Vibration Isolation, ASME, 1995-8, p295-p301.
- (4) 藤田聡, 藤田隆史, 佐々木陽一, 藤本滋, 成川昇, 鶴谷千秋; 産業施設に適した建屋免震構造の基礎的研究 (第3報 免震性能に及ぼすエネルギー吸収装置の影響), 日本機械学会論文集 (C編), Vol.53, No.496, 1987-12, p138-p144.
- (3) 藤田隆史, 藤田聡, 佐々木陽一, 藤本滋, 鶴谷千秋; 産業施設に適した建屋免震構造の基礎的研究 (第1報 履歴ダンパを用いた場合の免震性能), 日本機械学会論文集 (C編), Vol.53, No.491, 1987-7, p122-p130.
- (2) 藤本滋, 佐々木陽一, 馬目栄二; 流体中で振動する角柱群の減衰特性, 日本機械学会論文集(C編), Vol.51, No.471, 1985-11, p3004-p3009.
- (1) 藤本滋, 下郷太郎, 有井満; 非線形ダンパを持つ500 KVしゃ断器地震応答解析, 日本機械学会論文集, Vol.43, No.375, 1977-11, p4069-p4080.

#### 【所信】

日本地震工学会は、地震に関連する様々な分野の方々が集い、分野を横断する議論や研究、総合的な研究の成果を発表できる場です。その中で、私は、プラント機械設備を対象にした耐震・免震・制振設計の観点から日本地震工学会の学会発表やいくつかの委員会活動に参加してきました。そんな活動の中で気づくことは、学生や若手研究者の参加が少なくなっていることです。その要因は様々ありますが、日本地震工学会の課題に絞れば、学生や若手研究者にとって地震工学会の活動に魅力が少なく、存在感が薄いことではないかと思えます。若手の方々は自分の専門性を高めるためにその専門に近い学会を優先しがち

です。そのため、本学会が地震関連問題に関して、様々な分野の研究者や実務者が集い総合的な議論ができることが若手の方々に十分に認識されていないからだと思います。日本地震工学会を活性化し、発展させるためには多くの若手の方々にも参加してもらうことが必要です。このためには、日本地震工学会の活動を今以上にアピールすることだけでなく、若手の新しい研究や研究の芽を評価できる論文投稿制度を創設する必要があるのではないかと考えています。監事として選出されましたら、監事としての実務を着実に進めるだけでなく、上記に述べた問題解決にも貢献させて頂ければと存じます。

以上